

話題提供

温泉から地域再生を考える

～健康と温泉フォーラム第70回月例研究会～

NPO法人 ローカル・グランドデザイン
理事 坂本 誠

1. 地域の直面する課題・陥った隘路

(特に農山村を中心とした「過疎地域」において)

(1) 人口減少が避けられないなか、 縮小するパイを奪い合うマイナス・サムゲーム

縮小するパイ

- 2040年までに全国の若年女性は4割減
- 2065年の全国人口は8,808万人(社人研推計)

人口争奪

自治体A

自治体B

自治体C

住宅を新築したら
100万円プレゼント！

移住して20年住めば
土地と住宅をプレゼント！

移住後3年間は
月10万円の生活保障！

少数の「勝ち組」と多数の「負け組」を生み出す
不毛かつ不幸な人口獲得競争

(2) 多様性とつながり力の低下

「規模の経済」を追求してきた現代社会

専門・特化

集中・合理化

規模拡大

自治体 = 自立性・専門性の確保・経費節減
病院 = 高度な医療水準を確保・経費節減
学校 = 教育水準を確保・経費削減



規模拡大・合理化

農山村における多様性の喪失

—農山村疲弊の要因①—

- かつての農山村
 - 田畑や山など豊かな地域資源を活用しながら多様な生業を育み、自律的に暮らしを営んできた



- 現在の農山村
 - 近代化にともなって、農山村の生業を次々と捨象し、モノカルチャー化していった

農山村における多様性の喪失～農村の場合 —農山村疲弊の要因①—

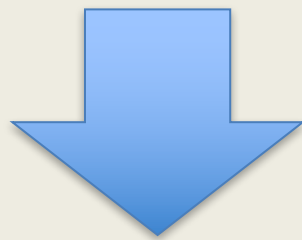
田・畑

米

麦・大豆

野菜

畜産

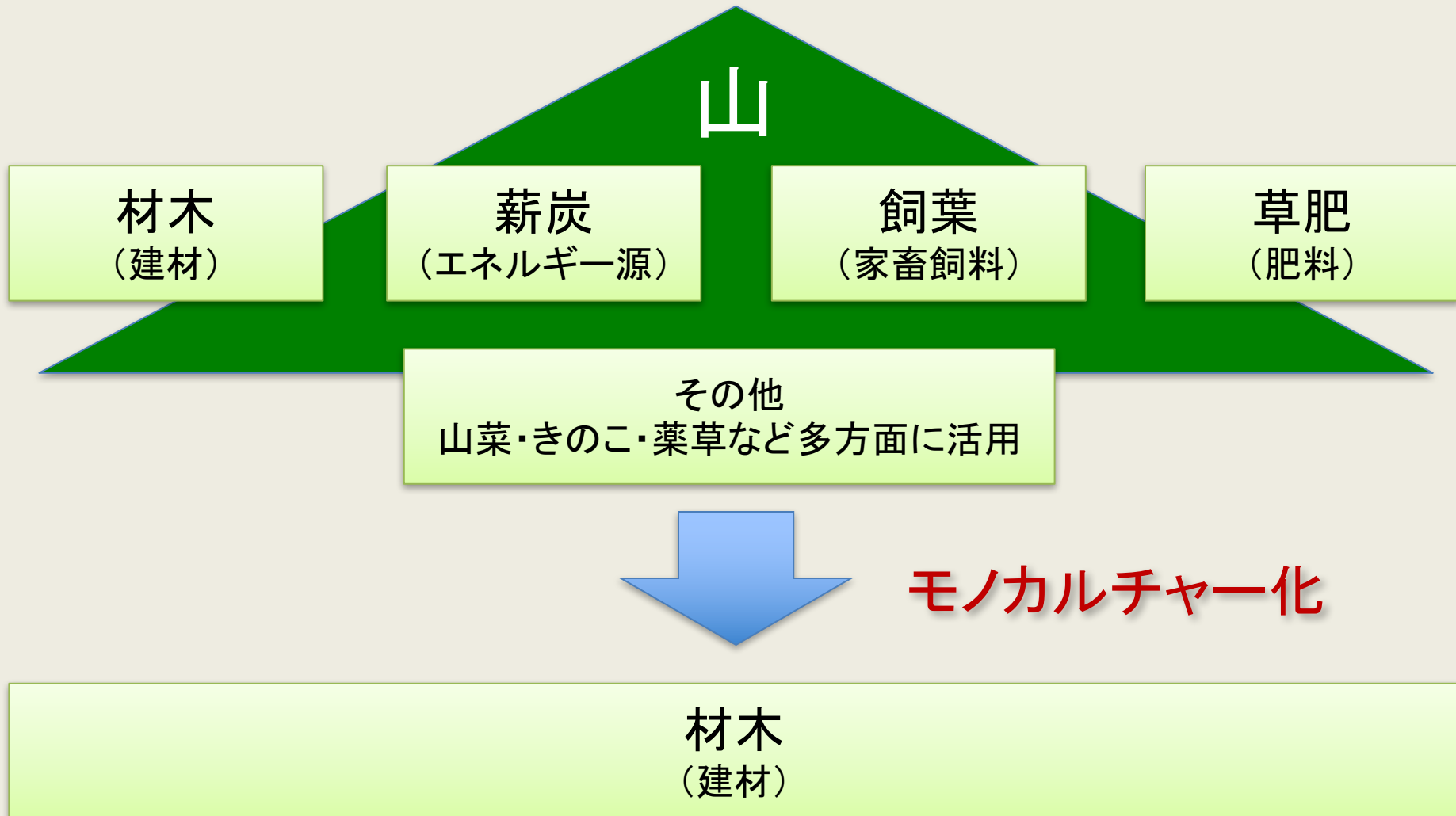


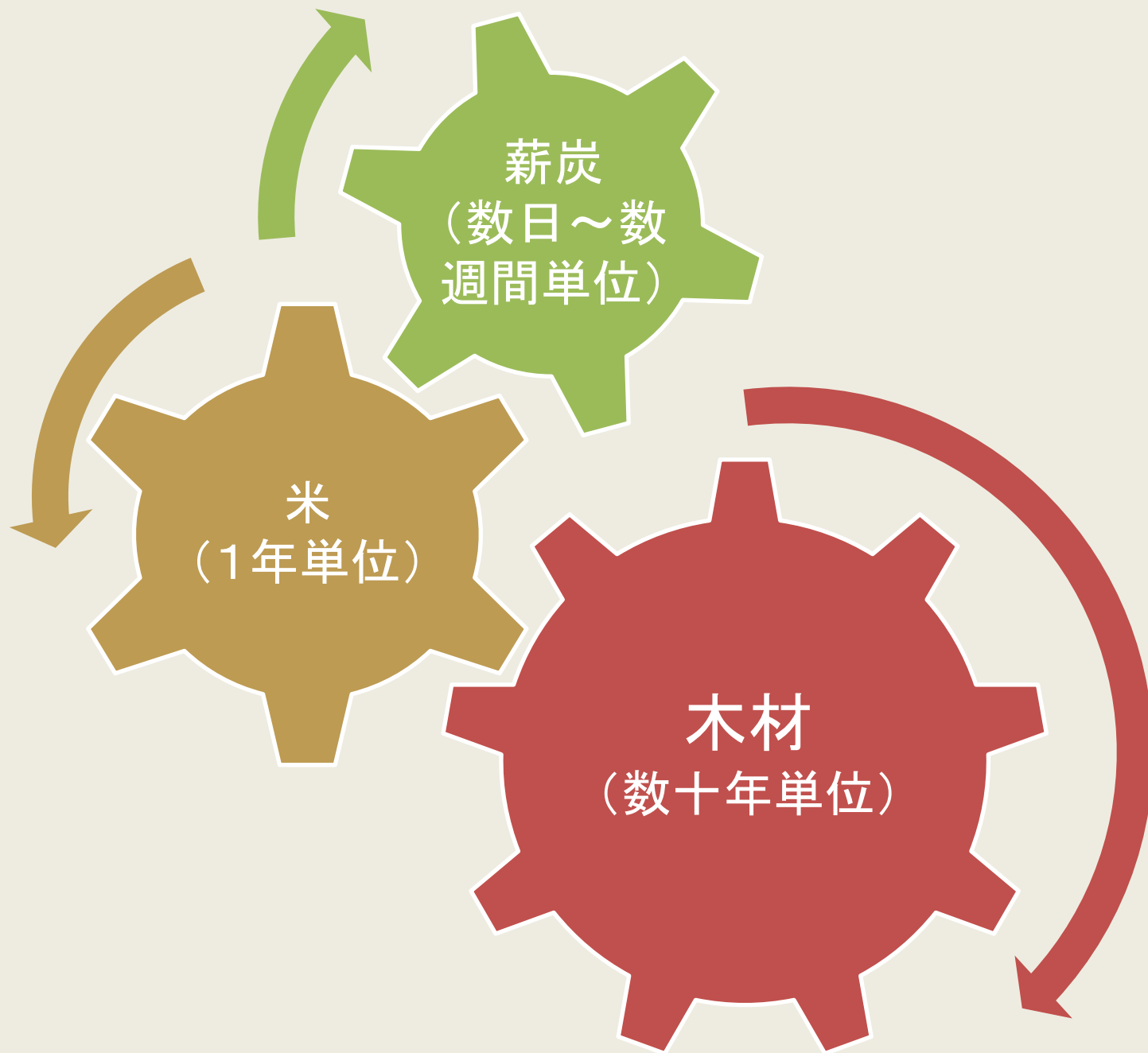
モノカルチャー化

米

農山村における多様性の喪失～山村の場合

—農山村疲弊の要因①—

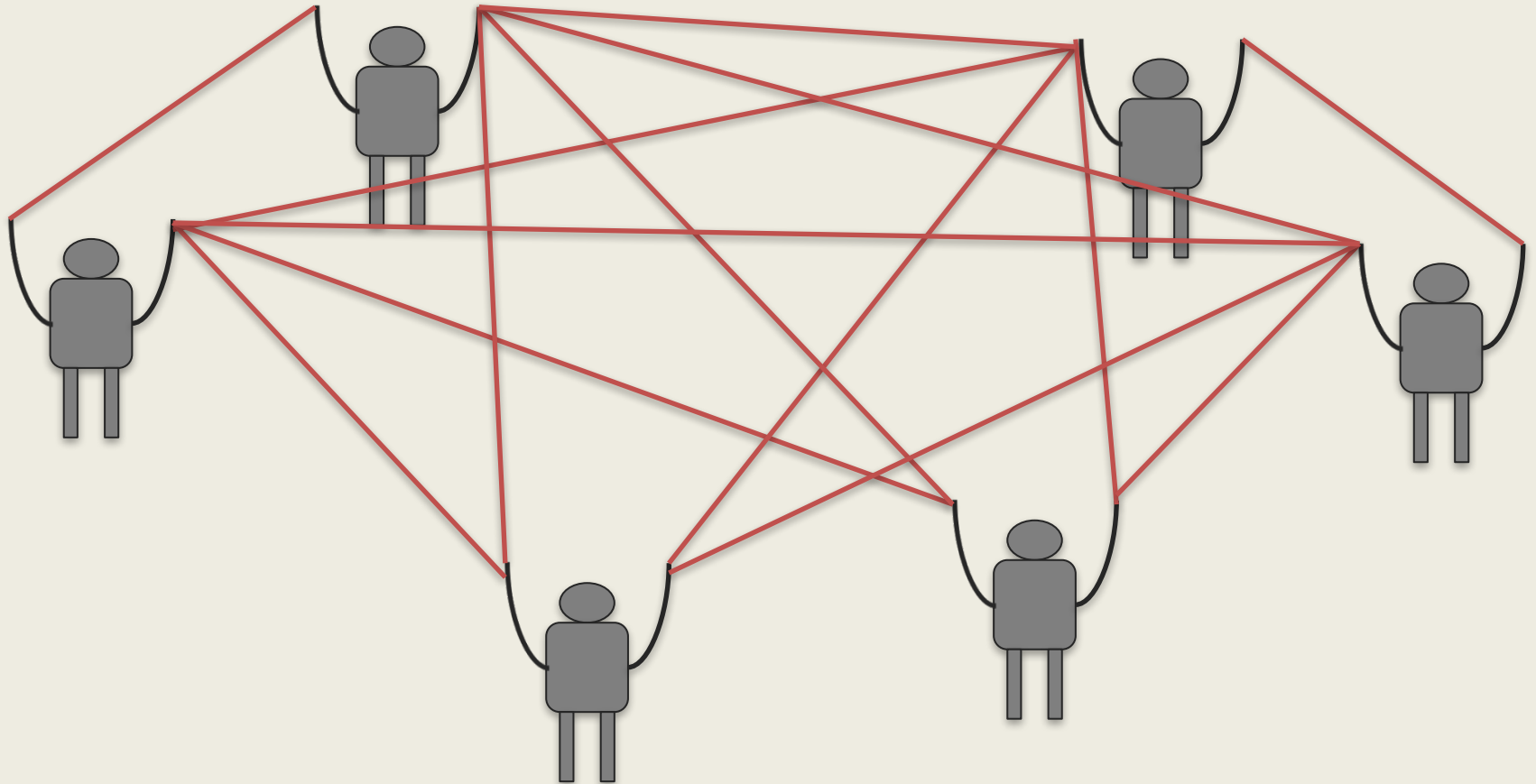




農山村における「つながり」の弱体化

— 農山村疲弊の要因② —

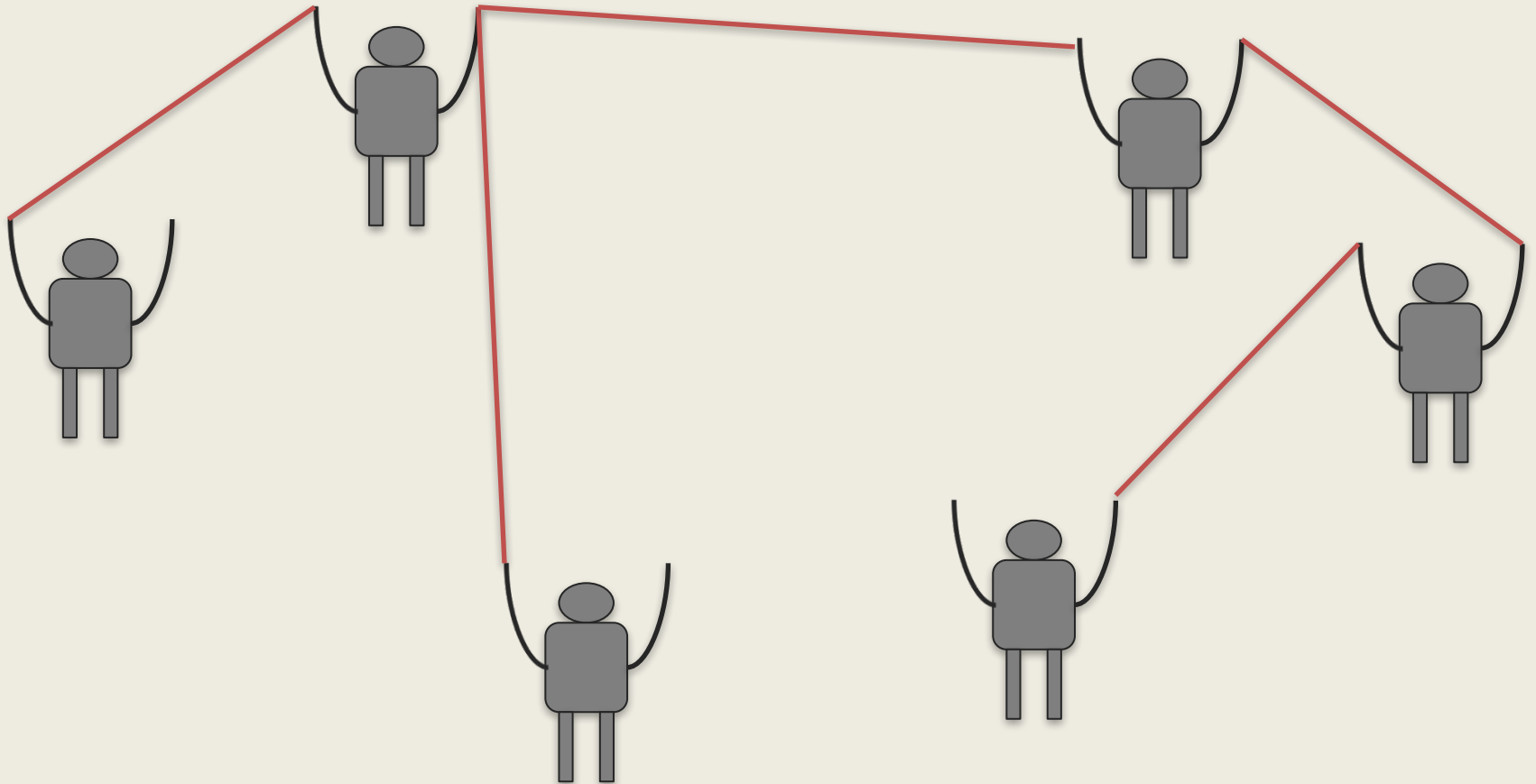
- 農山村は、人口密度で言えば、「過疎」かもしれないが、住民どうしのネットワークで言えば「過密」
→「過密」とも言える強固なネットワークで地域を支えてきた農山村



農山村における「つながり」の弱体化

— 農山村疲弊の要因② —

ところが、農山村においてもコミュニケーションの機会は減っている
→ 寄合の減少・自動車社会・ネット通販の普及・・・



農山村における「つながり」の弱体化 — 農山村疲弊の要因② —

集落の小さな酒屋の一角が、
皆が気軽に集まれる集いの場(たまり場)だった...



【小括】農山村社会が隘路に陥った要因

現代社会

人間や組織の多様性を捨象し、機能ごとに分化と自立を要求



「1人ひとりの人間」ではなく
「数字としての人口」を優先



不毛・不幸な人口獲得競争



集約・合理化による
「規模の経済」を追求



「つながり力」は低下
「強靱性(安定)」の喪失

2. 隘路を打開するためにできること

解決に向けてできること

(1)「人口」ではなく「人間」を大事にする社会をつくる

人口を増やすことが大事なのか？

1人ひとりの住民(人間)を幸せにすることが大事なのか？



そこに住む1人ひとりが、健康で幸せに生きられる社会づくり

(2)範囲の経済(⇔規模の経済)を重視する

規模拡大による経済合理化を目指すのではなく、
「つながり」による相乗効果と強靱性の向上を目指す



①「選択と集中」ではなく、**多様性の重視**とその**複合化**を目指す

(「一本勝ち」できなくとも、「合わせ技」で勝っていく)

②地域内の循環・交流の密度を高め、「**つながる力**」を強化する

(1)「人口」ではなく、「人間」を大事にする 社会をつくる

- 住民1人ひとりの【個性や能力(知恵や経験)】を再確認し、【思い】に寄り添うこと
- 住民の地域での【居場所(活躍できる機会・気軽に集まれる場所)】を設けること



個性あふれる多様な人びとが、
コミュニケーション(つながり)を育める地域づくり



人口減・高齢化に悩む過疎地域
でも、1人ひとりに目を向ければ、
個性あふれる多種多様な人々がくらしている

「地域づくり」の大原則に立ち返る

地域づくりとは

住民が互いの役割を認知し合える関係づくり



人びとの地域における居場所づくり・役割づくり

- 〔 1人ひとりが
- 地域に自らの個性や能力を活かせる場所がある
 - 地域の中で自分の存在が認知されていると実感できる
- 〕

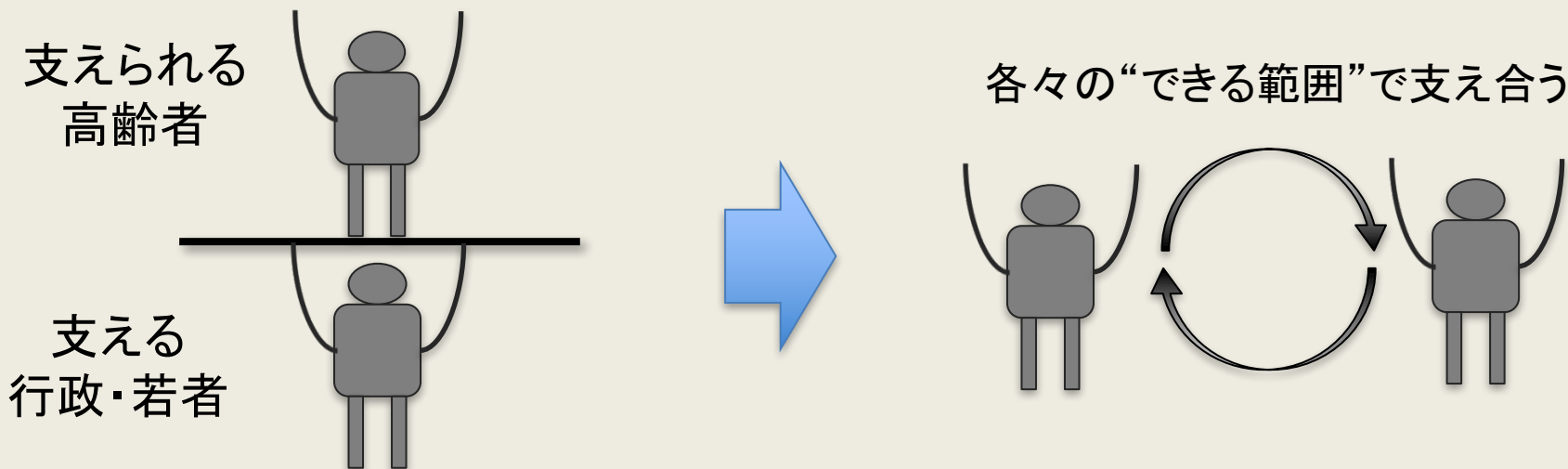


人びとの誇りと地域に対する愛着の再生

- 〔 地域の中で認められる⇒誇り
自分の存在が認められる地域に対して⇒愛着
- 〕

高齢化社会への対応策をめぐって

- 「支える側」と「支えられる側」の二分論で考えている限り、高齢化対応は困難になるばかり
- 各々が「できる範囲」で支え合う、「おたがいさま」の関係づくり＝「共」の再構築



従来：【支える側】と【支えられる側】の二分論

今後：互酬性の及ぶ関係＝「共」の再構築

(2) 範囲の経済(⇔規模の経済)を重視する

- ① 多様性の重視とその複合化
- ② つながり力の強化

①多様性の重視とその複合化

- 生産の多様化(⇔稲作・林業への特化)
 - 土壌・気候など地域の特性に応じた多様な品目を育てる
 - 木材生産だけでなく、薪炭等も含めトータルで山を活用
- 生産者(担い手)を多様に捉える
 - 高齢農家や兼業農家も「担い手」として捉える
(例)「年金＋60万円」稼げるしごとづくり
＝お年寄りの知恵や技を活かした加工・直売など
- 地域複合経営の視点
 - 薪炭エネルギーの活用
→環境面だけでなく、域内消費を通じて地域経済にも恩恵
 - 「多業」(副業的雇用の組み合わせ)による雇用創出

【参考例】 林業と製茶の組み合わせにより、季節ごと繁閑を吸収して若年層雇用を創出(宮崎県諸塚村)

諸塚村の課題

▼平地が皆無に近い山間地であり、就労機会を求めて、激しい人口流出

人口の推移

1965年(昭和40年) = 5,636人

↓

2010年(平成22年) = 1,740人



【参考例】 林業と製茶の組み合わせにより、季節ごと繁閑を吸収して若年層雇用を創出(宮崎県諸塚村)

▼フルタイム雇用は限定的(役場職員など)だが、

一方で、季節労働などにより収入の不安定な第1次産業(村の主要産業)は人手不足

- ・茶業は、繁忙期(5～6月)に労働が集中し、担い手確保が課題。
- ・林業は、作業が天候に左右されることから日給制で、収入が不安定⇒人手不足



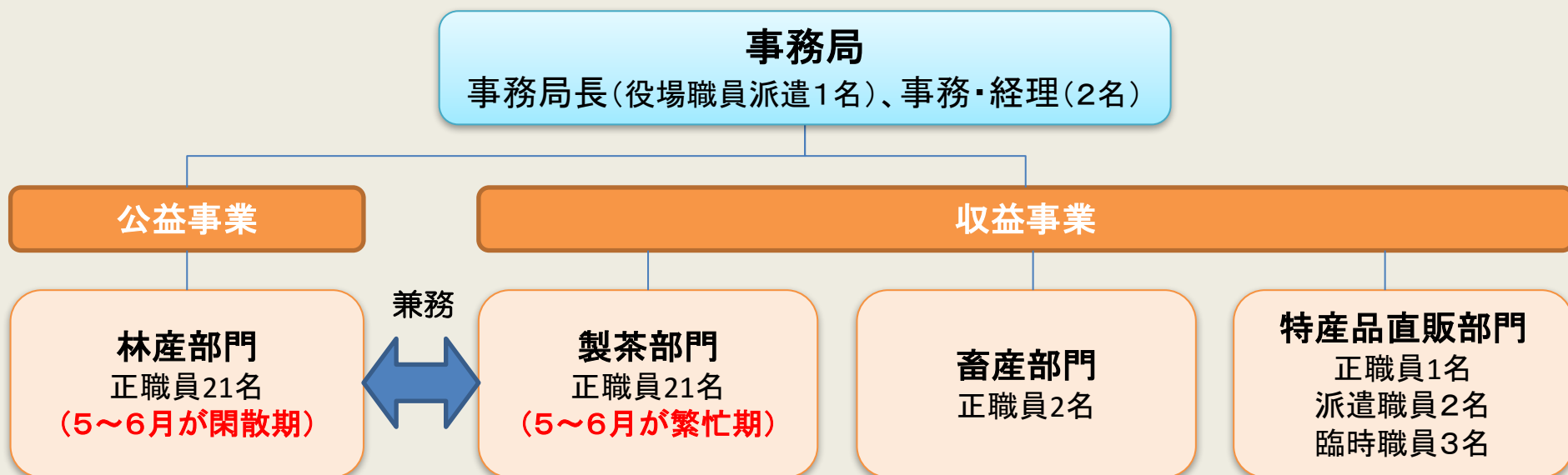
●平成7年3月、財団法人ウッドピア諸塚(現在は一般社団法人)を設立

⇒財団の正職員として採用し、林業と茶業を兼務させることにより、季節ごと繁閑を吸収

⇒月給制と週休2日制を実現

⇒平成27年時点では29名を雇用(このうち2,30代が3分の1を占め、うちIターン者も4人)

【 ウッドピア諸塚の組織構成図 】



多業(副業的雇用の組み合わせ)による 安定した生活形成が可能な社会システムの設計

現状把握

- 農村において、フルタイム雇用の確保・拡大は困難
むしろ、農山漁村において現在取り組まれている雇用創出策は、専門的雇用に創りだそうとしているために、十分な成果が上がっていない面もあるのではないか
- 一方で、副業的雇用(短時間雇用・季節雇用)は確保の余地あり
(むしろ人材不足)

対応策

副業的雇用の育成とマッチングの強化による雇用創出
多業(副業的雇用の組み合わせ)により、1人分の雇用を創り出す



「百姓」の復活

②「たまり場」づくりを通じた「つながり力」の回復

【提案】

かしこまらずに気軽に集える場所＝「たまり場」づくり

【具体的には...】

「集落カフェ」「集落居酒屋」

3. 地域再生に向けて、 温泉に何ができるのか？

1)「つなぐ場」としての温泉

人と人をつなぐ場としての温泉

温泉の成分や効能だけを求めるならば、温泉水を売ればよいかもしれないが、そういうものではない。湯治客どうし、地域の人との交流が湯治客を元気にする要素もある。

例) 豊富温泉

地域と地域をつなぐ場としての温泉

温泉街＝周辺の農村(むら)から人が集まる「まち」
社交場としての温泉＝「たまり場」

そもそも、温泉は「人」と「自然」の接点

自然の恵みである温泉に人の手が加わってはじめて、入浴の対象としての温泉が成立し、温泉文化が育まれてきた。

限りある貴重な温泉資源を持続的にかつ有効に活用するためのさまざまな工夫がされてきた。

2)「つながり」を失いつつある温泉

「規模の経済」の追求

- ・規模拡大による経済合理性の追求
- ・ホテルや旅館ごとに囲い込み→自立・自己完結の追求



▼多様性の喪失

- ・温泉地・温泉街の画一化
- ・ホテルや旅館の画一化(食事・サービス...)

▼「つながり力」の低下

- ・事業者ごとの分断
- ・温泉と地域の分断

宿泊客が地域に還流しない→人の姿の见えない温泉街
温泉を通じて住民の地元に対する誇りは育まれているのか？



・【文化】は多様性の中に育まれるもの／【街】は“つながり”を糧に発展するもの



「多様性の喪失」と「つながり力の低下」は、
温泉が育んできた文化や、温泉を通じて発展してきた街を衰退に追いやる

3) 解決の方向性

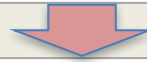
温泉地としての「範囲の経済」を目指すこと

- ① 事業者相互だけでなく、
温泉をとりまく人々や地域とのつながりを再構築する
- ② 温泉を通じた地域複合経営の視点をもつ

①事業者相互だけでなく、 温泉をとりまく人々や地域とのつながりを再構築する

第1段階

- ・旅館やホテル単体で規模を追い求めることの限界、自立・自己完結を追求することの限界に気づく



第2段階

- ・事業者のみならず、温泉をとりまく人々（地域住民・常連客）の温泉に対する思いに耳を傾ける



第3段階

- ・温泉に対して思いを抱く人々が、思いを発露できる場所=温泉に関われる機会を提供する/大事にする
(住民参加型のイベント・周辺農家による直売市場など)
- ・人々が気軽に集えるたまり場を用意する/大事にする



温泉が、地域の経済だけでなく、そこに集う人々の心を潤し、
“つながり”を豊かにしうる存在であることを再認識すること

温泉に対して思いを抱く人々が、思いを発露できる場所
温泉に関われる機会や場所を提供する/大事にする



温泉に対して思いを抱く人々が、思いを発露できる場所
温泉に関われる機会や場所を提供する/大事にする



人々が気軽に集えるたまり場を用意する/大事にする



下諏訪温泉



肘折温泉

②温泉を通じた地域複合経営の視点をもつ

- 雇用
 - － 繁忙期と閑散期の雇用需要の波を吸収する仕組みを地域で考える
- 食
 - － 地域農業との連携を、地域ぐるみで考える
- エネルギー
 - － 温泉の熱エネルギーを地域に還元できないか



地域との“つながり”を大事にして強化することで、
解決できることは増えていく

③地域とともに生きる温泉、温泉とともに生きる地域へ

療養地としての温泉のあり方を探る(見直す)動き
その際、地域内外の多様な主体が関わる仕組みをつくる

Case1: 鳴子温泉

田んぼ湯治: 新しい湯治スタイルの提案

「鳴子の米プロジェクト」: 温泉旅館も交えながら、地域農業を守るしくみづくり



冷涼な気候で米が育てづらく、
耕作放棄地が広がる



地域内でとれた米を皆で買い支えるしくみ
→観光地としての景観保全

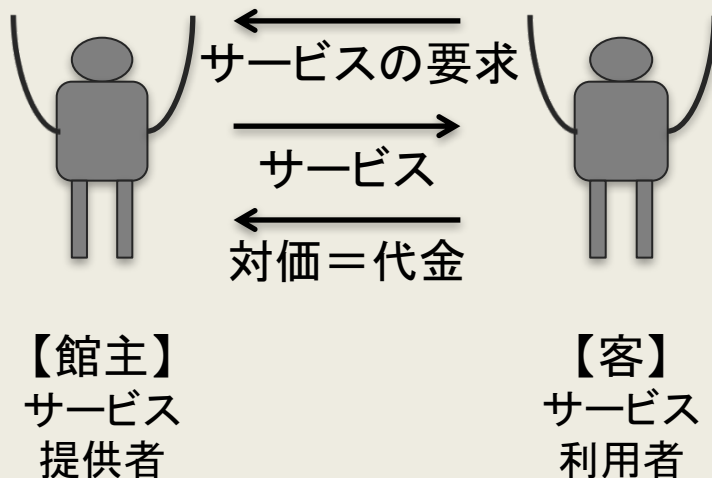
③地域とともに生きる温泉、温泉とともに生きる地域へ

療養地としての温泉のあり方を探る(見直す)動き
その際、地域内外の多様な主体が関わる仕組みをつくる

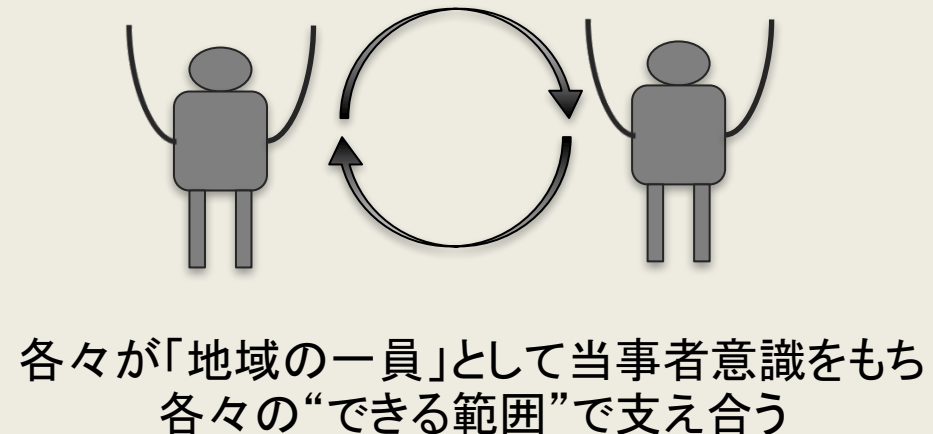
Case2: 豊富温泉

「館主－客」「サービス提供者－サービス利用者」という関係を乗り越えて、
皆が「地域の一員」としての当事者意識をもって、温泉街の活性化にとりくむ

従来の関係



これからの関係



【温泉旅館・施設】と【客(利用者)】の二分論

互酬性(おたがいさま)の関係